Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-22

意志あるところに道は開ける ： ロンドン補習授業校における国語教育 ： 学術 Weeks2020 シンポジウム報告

勝冶, 友紀子 ； 眞藤, 拳 ； 西, あかね ； 蓑毛, 智樹 ； 岸本, 佳奈美 ； 徐, 楽瑶 ； 川地, 亜弥子

(Citation)
教育科学論集,24:81-85

(Issue Date)
2021-02-28

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0042457

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0042457

意志あるところに道は開ける：ロンドン補習授業校における国語教育

―学術 Weeks2020 シンポジウム報告―

Where there is a will, there is a way: Japanese lesson in Japanese Saturday School in London

勝 冶　友紀子*　眞　藤　拳*　西　あかね*　蓑　毛　智　樹*　岸　本　佳奈美*　徐　楽瑶*
KATSUYA Yukiko　SHINDO Ken　NISHI Akane　MINOMO Tomoki　KISHIMOTO Kanami　JO Rakuyo
川地　亜弥子**
KAWAJI Ayako
（*人間発達環境学研究科・博士課程前期課程院生）（**同・准教授）

キーワード：国語教育 Japanese education, 継承語教育 Heritage Language Education, ロンドン補習授業校 The Japanese Saturday School in London, 共感 Empathy

はじめに

本稿は、学術 Weeks2020「Where there is a will, there is a way: Current status and issues of education in England（意志あるところに道は開ける: イギリスの教育の現状と課題）」第１部「ロンドン補習授業校での国語教育の実践を通じて」（講師金子ひとみ氏、以下講師と記す）の要点の報告である。2020 年 11 月 15 日(日)　日本時間 21：00～24：30 に Google Meet 上で開催した（第２部含む）。司会はイギリス側から寶槻 Grant 純子氏が、日本側から勝冶が担当した。

児童生徒自身にルーツのある言語教育の知見から、イギリスの教育の現状と課題について講演を受け、日本における教育の課題と展望を明らかにすることを目的として、本企画に取り組んだ。ロンドン補習授業校（以下、補習校と略）で行う国語の授業は、毎週土曜日の週１回、3 時間で年間 40 回行われている。その 40 回で日本の国語の教科書を使って授業を行うため、タイトなスケジュールになっているが、講師は子どもたちが学習する動機づけを大切に考え、様々な工夫をこらした実践を行ってきた。そのなかでも特に「絵本作り」と「家庭学習ノート」についてお話しいただいた。

補習校では、家庭における日本語学習は必須としているものの、家庭で日本語を使用する頻度は様々であり、そのことが日本語のレベルの差につながっている。底上げをはかると同時に、日本語が得意な子どもたちがさらにレベルアップできるように、とこの取り組みを考えられたそうだ。「落ちこぼれ」も「吹きこぼれ」もない学校教育が目指されているなか、多くの視座を与えてくださる講演だった。

COVID-19 の拡大の中ではあったが、オンラインを活用しての講演会ということもあり、日英双方から多数の参加があった。参加者は、学内学部生 23 名、その他日本在住者 25 名(学内院生、他大学院生、現職教員等)、イギリス在住者 23 名（日本語クラブ関係者、教え子の保護者、補習校関係者など）であった。日程が合わなかった人からの問い合わせがあったため、録画視聴会を同年 12 月 13 日（日）21:00～22:30 に開催した。10 名の参加があった。合計で 81 名の参加があった。

以下、１～４で当日の講演と質疑の内容をまとめ、５で講演後に寄せられた感想を抄録し、最後に総合考察を行う。

１．講師及びロンドン日本人補習校について

（話者：寶槻 Grant 純子氏）

講師は 40 年近く教職に就いている。渡英し、補習校が始まったばかりの頃から、毎週土曜日に日本語を教えてきた。ここでの日本語の授業は、日本の子どもたちが日本で受ける国語の授業にあたる。

補習校で行う日本語の授業は、週１でしかも３時間しかないため、週５で行っている日本の学校と比較するとタイトなスケジュールになっている。そんな厳しい中でつぶれない授業をしていくために必要なことのひとつは、いろいろな人から学んでいくこと。学生のみなさんには、その学ぶ機会のひとつとして、この場を設けさせていただいた。

ここで、一つ一つの活動がどんなに大切か、ということを言っておきたい。たとえば、朝学習とは担任がミーティングしている間の自主学習のことだが、「漢字パワーアップ」「年寄り丁寧チャンピオン」という活動に取り組んでいる。きれいに一単語書けるごとに年をとるというルールで年寄りを競う。また、「自分の名前は自分を表すものだから、丁寧に書こう」ともいつも指導している。自分が１年間やってきた足跡になるためだ。子どもたちは書いたものをすべてファイリングしている。朝のあいさつは生活の基本であり、あいさつをすると気持ちがしっかり入るので、丹田（臍より少し下のあたり）に力を入れてあいさつをしっかりしよう、お返事をしっかりしようと指導している。また、漢字の復習をしてテストする時には、意味調べを必ず行い、ファイリングする。これを１年間やると、子どもたち一人一人の自分の「辞書」になっていき、学びの足跡となるのだ。帰りの会もたった 10 分

だが重要な時間だ。ここでの、宿題を聞き、写す活動では、低学年では書き写すことができない子もいるし、6 年生だと早く帰りたくて適当にやる子もいるため、しっかり先生が見回って書き写すよう促している。また、ここで工夫していることのひとつは、「今日のナンバーワン」である。今日 1 日〇〇をがんばった子はだれだろう？と子どもたちに投げかける。先生が言うのではなく、子どもたちから自発的に名前が挙がる。子どもたちには、見ている人は見ているのだ、評価してくれるのだ、ということを実感させる場だ。

２．ロンドン補習授業校での国語教育の実践

（話者：講師）

（1）はじめに

36 年間全身全霊、補習校でやってきた。なんとか子どものやる気を引き出そうと工夫してきた。私が行ってきた活動は、ひとつひとつに意味がある。朝学習然り、朝のあいさつ然り、今日のナンバーワン然り、活動のひとつひとつが重要だ。そうした活動のうち、今回は「絵本作り」と「家庭学習ノート」について話していく。

（2）絵本作りについて

①　絵本作りを始めた経緯

補習校では小学校 3 年生で絵本作りを行う。絵本作りを始めたのは 20 数年前のこと。当時、作文を書こうと子どもたちに言うと「ええー、やだー、作文難しいし、なんて書いていいか分からないもん」という返答が返ってきた。苦手意識のかたまりと感じる返事であり、これはいけないな、と思った。「私自身書くことに難しさは感じる。なんとか、楽しく作文できないか」と考えて生まれたのが絵本作りだった。

当初の目標は『たから島の冒険』の続きを書くことであったが、子どもたちが一から考えた絵本でもいいかなと思うようになり、次第に子どもたち自身が文と絵を作る形式になっていった。今となっては、表紙・裏表紙・背表紙までつき、見返しがあり、しおりを作る子、バーコードや値段を書く子もいるなど、パワーアップしている。これらは一つ一つが世界に 1 冊だけの絵本である。作られた絵本は展示会で補習校の全校生が見ることができる。

3 年生になった子どもたちの第一声は、「金子先生、絵本はいつ作るの？」である。「作文をするよ」と言うと嫌がるが、絵本作りは子どもたちが大変楽しみにしていることがわかる。

②　絵本作りの過程

すてきな絵本ができあがるのだが、3 学期にやり始めていきなりできるようなものではない。1 学期から継続学習をした結果の集大成である。

1 学期には、まず先生が持っている絵本を紹介する。子どもたちは、ここでどんな本を作りたいかという想像を膨らませる。しかけ絵本などを見せると喜ぶ。

2 学期にはテーマ作りに入る。このプロセスはとても重要で、読み手に何を伝えたいかを決定する時期だ。この時、「テーマ」「あらすじ」「起承転結」等、絵本作りを通して出てくる言葉も教える。その学年で教科書に出てこない言葉であっても、絵本作りに必要なら教えてしまえばいい。特に、「起承転結」などは小学生には難しい言葉だが、ダンスと歌で「きしょうてんけつ～」と、教えると子どもたちがまねして覚えていた。

2～3 学期にいよいよ下書きの場面ごとに絵と文を書いていく。句読点、改行、漢字、誤字脱字チェックなど、先生、保護者一丸となって指導する。大変な時期だが、徹底して直接伝えるようにしている。

③絵本作りの意義

週 1 回の短い時間でそんな絵本を作っている暇があるのと思われるかもしれない。しかし、だからこそやるのである。動機づけがない限り、日本語を普段使っていない子どもたちには、国語の教科書をやるだけではつまらない。目の前の子どもたちを見て、教科書のどの部分を教えればいいかを考える。決して、教科書のすべてを教える必要はない、と私は思う。

およそ 2 学期に下書きをして、3 学期から本番の絵本作りに入るのだが、その際子どもたちには、計画表を書かせる。見通しの勉強や計画の勉強の意味もあるのだ。

④作った絵本の紹介

最初に私の作った絵本を紹介する。『マララのまほうのえんぴつ』である。最初は 1 枚ずつばらばらで、平たい状態から作る。英語版の『マララのまほうのえんぴつ』を日本語に翻訳して文にした。絵は、絵本をコピーして色を塗った。これら 1 枚 1 枚をのりづけし製本すると絵本が完成する。

苦心のあとには「喜心」くる、といつも思っている。先生・親・子必死になってやりとげることで、最後にはすてきな絵本ができるのだ。

⑤絵本作りへのモチベーション

自分の好きな絵本を作るためには、きれいなものを仕上げたい！という動機づけが重要で、だからこそきれいな字が書ける。ただ作文を書くだけでは身につかないことだ。（記録者注：ここで司会の寶槻氏より、「講師と絵本を作った子どもたちは、自分でやりたいと言って絵本作りに取り組み、絵本を今でも宝物にしている。絵本作りに対するモチベーションが高いことがわかる」、という補足説明があった。）

（2）家庭学習ノートについて

①家庭学習ノートを始めた経緯

家庭学習ノートを紹介する。表紙がオレンジなので、今ではオレンジ・ノートと呼ばれている。なぜこれを始めたかを話したい。それまでは、全部ファイリングする形で宿題をプリントで配っていた。しかしある時、「今目の前にいる多様性のある子どもたちに、一律のプリントを渡して、それが本当に勉強なのか。やらされるのは勉強じゃない、自分からやるのが勉強だ」と気づいた。それでこのプリント学習はやめようと思った。子どもの努力も先生の努力も報われない。配布

されるプリントもいいけれど、自分でまとめたノートが一番ではないか。ノートを取る時は自分のためのノートにしようといつも子どもたちに言っている。「ただ写すんじゃだめだよ」と。それなら、宿題もプリントではなくてノートにすればよいのだと思い、この家庭学習ノートを始めるに至った。ここで一番のポイントは、受け身のものではいけないということだ。これは子どもたち自身にとっての、自分のための勉強のノートでなくてはならないのである。

②家庭学習ノートの意義

家庭学習ノートは、「金子先生から、小 3 になったお祝い、プレゼントだよ」と言って渡す。一人一人名前を呼んで、一人ずつ渡していく。そうして、このノートは特別なものになる。「家庭学習ノートは他のノートとは違うんだよ、金子先生からのプレゼントだよ」ということを示している。

さらに、「土曜日、他の子が遊んでいるときに、どうして難しい日本語を勉強しなくちゃいけないの？」という子どもたちに、動機づけをするノートでもある。そのように子どもたちに言われたときには、こう言う。「みんなの体の中には、日本があるんだよね。日本語ができないのはもったいないよね。どうして自分は補習校に来なくちゃいけないのか、考えなくちゃいけない。それが大切なことだよ」と。子どもたちには一人一人夢があり、その夢を書いてもらうが、この夢を実現するために日本語も頑張っていこうよ、と動機づけをするのだ。たとえばサッカー選手になりたいという子には、日本に遠征に行って日本語が話せなかったら困るじゃない、と言う。またある子がお医者さんになりたいという夢を英語で書いてきた時、私は日本語に翻訳してその子と共有した。

家庭学習ノートは、書くことの練習でもある。小 3 になっても、ひらがなからきちんと練習する。マス目を使って書くことが大切だと思っている。マス目を使って書くといい字になる。だから私は懲りずにマス目を作るよう促す。

子どもたちには、1 年の終わりに最後のコメントを返す。たとえば、「やる気と頑張りとアイディアが詰まった、補習校の宝ですね」などと話す。

③家庭学習ノートのもうひとつの可能性

家庭学習ノートを子どもたちが書いてくるなかで、いいところがあったら、クラスのみんなに紹介していた。この時、普段自信がない子も褒められればすごくうれしい。その子が主人公になれる。

本当の勉強をしてほしいと思って始めた家庭学習ノートだったけれど、別のいいこともあったのだ。それは、自信のない子が自信をつける機会になる、ということだ。

④宝物のことば――子どもたちに伝えてきたこと――

家庭学習ノートは、先生と子どもたちの心の通う場所である。日本では、秋田県が学力ナンバーワンだそうだが、その秘訣は、補習校における「家庭学習ノート」のようなものだったと聞いている。

先生を目指す学生へ伝えたいことがある。私の好きな宝物のことばだ。 補習校で 3 年生になった子どもたちにも最初に話している。それは、「恕」。人がしてほしくないことはしない、してほしいことをするということ、簡単に言えば思いやりである。私の尊敬する日野原先生の著書にも出てくる。訓読みで「ゆるす」という。他人をゆるすということは、自分をゆるすということである。ある教え子が、「恕愛」と筆で書いてプレゼントしてくれた。恕に愛を組み合わせた素敵な言葉だと思う。

（3）学生へのメッセージ

最後に大学生に伝えたいことを。子どもたちには、優も劣もない。子どもはみんな大切な存在、素晴らしい存在。だから、どうか心から尊敬し、信頼し、愛してほしい。そうすれば、子どもたちは、安心して自分がもっているいっぱいのことを、わくわく生き生きして自信をもってやる気をもって見せてくれるはず。ご自身の信念と情熱をもって、日本の子どもたちのために頑張って。全身全霊でやればかならず道は開ける。（記録者補：司会の實槻氏から、子どもたちを尊敬し、一人一人丁寧に接すれば、子どもたちはしっかり反応を見せてくれる、と発言があった。）

3．質疑応答の記録

（回答者：講師）

Q1：　現地校では、エッセイにとても力を入れて教育が進められていると理解しています。そうした教育を受けてきている子ども達も、日本語での作文では苦手意識が強いというのは、やはり言語についての苦手意識からでしょうか？

A1：　日本語の壁、やっぱり自信がないことが大きいと思う。

Q2：　絵本もノートもその完成度に驚きました。先生の熱意のコメント、愛のコメントが子どもにしっかりと届いて、「返したい、伝えたい」という気持ちで子どもは頑張れるのですね。先生のコメント量と称賛のメッセージがすごいです。それが一つの秘訣であると思いました。現地では、縦書きのノートは手に入りにくいのですね？　日本でも、縦書きより横書きが多くなっているように思いました。

A1：　イギリスで縦書きのノートは手に入らない。でもあえて縦書きでやっている。だけど、算数的な勉強をする子は、横書きにもする。基本的には普段は英語が中心だから横書き。日本語の文字は縦に書いた方が流れもいい。日本語を勉強するなら縦書きでスタート。でももちろん横書きもある。横書きがだめというわけではない。場合によってという感じ。

Q2：　金子先生は子どもたちにとても丁寧に寄り添っていらっしゃると感じました。コメントや丸つけなどに、どのくらいの時間を費やしていらっしゃいますか？

A2：　去年であれば、金曜日はほとんど徹夜、エンドレスだった。毎週土曜日の朝 5 時に同学年の實槻先生とミーティングした。子どもたちの書いている内容を見れば、気軽にコメ

ントを書くことはできない。心をこめて書いてきたものに対してきちんと返す。教師冥利に尽きる。（記録者注：ここで司会の實槻氏より、子どもは敏感で、教師がちゃんと書かなかった日は子どもに分かると補足説明があった。）

Q3：　家庭学習ノートに書く内容は100％子どもの自主性に任せているのでしょうか。それとも生徒によっては先生がヒントを出したり課題を出したりすることがあるのでしょうか。
A3：　課題を聞かれたことはほとんどない。提案はするけど、いろんなことを書いていいよと子どもたちに話す。いつもの言い方としては、3 年生でカタカナを覚えていない子に対しては、「カタカナの練習でもいいんだよ。自分の好きなポケモンとか漫画のキャラクターを書いてその説明を金子先生に教えてね」など。「金子先生に教えたいことを書いてきてね」と言っている。もちろんヒントを出したうえでの家庭学習ノートになる。（記録者注：司会の實槻氏より、お友達の学習ノートを見て、これやりたいな、と子どもが思うこともあると補足説明があった。）

Q4：　素晴らしい試みのご紹介をありがとうございます。日本で暮らすベトナムからの子どもたちの放課後の母語教室でのベトナム語教育に関わっています。やはり母語・継承語の多様性への対応や、学習動機の保持に苦労しています。放課後の努力が、原学級で評価されることも鍵のように思っています。①現地校（原学級）との連携はどうなっていますか？②小学校時代には学年が上がるにつれ母語学習動機が弱くなりながらもなんとか頑張れても、中学校に入ると勉強と部活とで母語学習を維持するのが難しくなることもあります。中学校以降のサポートはどうなっているでしょうか？
A4：①現地校のクラスとの連携は、全くない。ただ、補習校でできた絵本や習字を現地校で紹介することはある。②中学校以降のサポートについてだが、ロンドン補習校は小学部、中学部で終わってしまう。アクトンには高等部があるが、高校入試がある。小学校から中学校に移る段階、中学校から高校に移る段階で、日本語の勉強を続けるかどうかの岐路に立つ。日本人補習校の高等部に行く人は少ないのではないか。（記録者補：司会の實槻氏より、小学校では「おじいちゃんとしゃべりたい」等の思いがモチベーションになること、中学校の頃になると、GCSE のことを考え、将来日本語を使う仕事をしたい、日本語でいい成績を取りたい等の思いがモチベーションになること、また、いろんな国の人があつまる現地校のオープンデーで通訳などを任せられることが自信やモチベーションにつながることもあり、年齢が上がるにつれて、日本語に対する意気込みや姿勢も変わっていくことについて補足説明があった。）　小学校のうちに、「なんで日本語をやらなくてはいけないのか」というところをしっかりと育てる。その後は試験など現実的な問題が入ってくる。

４．講演小括―意志あるところに道は開ける

講師から、以下の小括があった。大切なのは「恕」である。英語にすると「empathy」。人のごとく思うことがこころの真ん中にあれば、どんなところであれ、道は開けていくのではないか。結論として、やはり学校であれば、先生の attitude が大切だ。子どものことを思う態度だ。そして、それをやるぞという will（意志）。作文が嫌いな子どもたちに対して、じゃあどうしたら好きになるのか、考えた。その答えが絵本作りだった。絵本作りは教科書のカリキュラムに入っていないのになぜやるのか。それは、目の前の子どもたちが一番いきいきとやることは何だろうと考えたときに、私にとってそれは絵本作りと家庭学習ノートだったからだ。Empathy と will をもってやること。みんなの意志があれば必ず道は開ける。

最後に、司会の勝治より、「結局は人間の問題、『恕』によって自分の実践や人との接し方が変わってくると学んだ。日本にも英国にもいい先生がいて、いい授業がある。これでよしとするのではなく、いろいろな人からいろいろなことを吸収できる教員になりたい」とまとめの発言があった。

５．補習校の国語教育実践に関する感想

（１）実践内容（絵本作り・家庭学習ノート等）について

①　絵本作りに関しては、あそこまで本格的な絵本を作ることができるのは、日本の小学校でも存在しないのではないか、と思うほどしっかりとした作りで驚きました。〔中略〕絵本を作るための学習を通して、子どもたちの中に無意識的に国語教育が蓄積されていくという流れが非常に素晴らしいものだと感じました。日本で現在言われているアクティブ・ラーニングにもつながる活動だと感じます。ぜひ実践してみたいです。家庭学習ノートは、日本の小学校でも多くの学校で自主学習ノートに取り組んでいると思いますが、見せていただいたもののような量のコメントがついているものを私は見たことがありません。金子先生の熱意の表れだと感じました。
②　絵本作りは、先生も子どもも一緒に一つの目的をもって学べること、動機づけになって学びが楽しくなっているところがとても良いと思いました。家庭学習ノートも子どもたちが主体的に自分のために頑張ることができるすごい教材だと思いました。私は全員が同じ課題をすることに慣れていたため、とても新鮮でした。先生が熱意をもって向き合えば、子どもたちは応えてくれることを学び、熱意をもって精いっぱい努力し続けることが道を開いていくことを実感しました。

（２）「恕」という言葉、教師の姿勢について

①　限られた時間でカリキュラムをこなさないといけない状況でも、子どもが楽しい、学びたいと思えるような動機を作ってあげられる学習が大事だと改めて感じました。そして、金子さんの子どもの些細なことを見逃すことなく、褒めてあげる優しいまなざしがとても印象的でした。生徒さんがどれ

ほどの人数であっても、一人一人をしっかり見て尊重し、謙虚な姿勢で向き合いたいと思いました。

② 文章を書くことに苦手意識を感じやすい子どもたちが意欲的に絵本作りに取り組んでいるというエピソードがとても印象的でした。学校での教育はどうしても教師からの指示によって行動することが多く、「させられている」というイメージを持ってしまう子どもが少なくないですが、そのような受動的な姿勢では、知識はもちろんのこと、学びに向かう力や自立して行動したり考えたりする力も育まれないと思うので、自ら勉強したいという気持ちが芽生えるように支援することが教師の大切な役割であると実感しました。家庭学習ノートなども教師がテーマを設定するのではなく、自分の興味関心に応じて学習することができるので、子どもたちは勉強しているという感覚をあまり持たずに、楽しんで行うことができるのだと思います。

③ 「恕」という漢字をつかって生きる指針を子どもたちにお伝えになっているというエピソードが素敵でした。多様性を背景にした子どもたちに対し、「一人、一人を心から尊敬し、信頼し、愛する」。このような先生が指導してくださったら、どこまでもその子は成長していくのだろうと思い、親の立場でありますが、深く勉強をさせていただきました。

④ お話や実践の節々から、子どもの可能性を信じて、真摯に向き合っていることが伝わり、私もそのような姿勢で子どもたちと関わりたいと思いました。〔中略〕先生とはいえ、自分が一方的に「教えてあげる」側だと思っていると、子どもたちの力を最大限に引き出すことはできないことを、最近卒業研究を行う中で感じていました。子どもたちの持つ力を最大限に、そして楽しく引き出せるよう、真摯に向き合い、子どもからも学び続けられる先生になりたいと強く思いました。

（3）継承語教育について

① 現地校の勉強をしながらさらに日本語を学ぶという大変な状況の中、子どもにいかに興味を持たせながら、また、自分の意思を持って、日本語を学ばせるか、非常に難しい問題だとは思いますが、複数のルーツを持つ子どもの親として大変参考になりました。

② 継承語・母語教育の現場はどこも教授側には教員、教材、教授法の確保の難しさ、受講側には子どものモチベーションの保持や学習者の多様性など多くの難しさが存在している。そうした中でのたった１冊の絵本の制作という取り組みは、一つの解法を示されたと思う。私にもベトナム系児童のベトナム語支援でバイリンガル・ビデオレターを作成し、ベトナムに暮らす日本語学習児童と交換をしたことがあった。バイリンガル・ビデオレターは交流相手の子どもたちよりも、日本の学校の教師や、ベトナム系の子どもたちの両親に効果を発揮したという記憶がある。

③ 私自身８年間海外で補習授業校に通っていた為、学習内容に共感を覚えました。補習校は高学年や中学校になるとメイン校の学校が忙しくなり、皆退学していくのが現状です。また、補習校に入学するのは子ども自身ではなく、ほとんど親の判断であることが多いと思います。そのため、低学年の間は楽しさを混じり入れて、日本語を学ぶことは楽しい、やりがいがあると少しでも気づかせられるような授業であることが本当に大切だと私も思います。

④ イギリスで現地校に通い、母親の自分以外とは日本語を使用する環境にない状況で、どうしたら子ども自ら日本語の勉強に興味を持ってもらえるかを長らく悩んでいました。〔中略〕これまで、書き取りをやらせて、なんとなく安心・自己満足していたのは母親である自分自身であり、子どもが楽しんでいるかという視点が抜け落ちていたと気づかせられ、反省しました。金子先生のクラスの生徒達の完成させた絵本は本当に素晴らしい作品でした。先生・生徒・保護者が一体となった１年間の努力の結晶ですね。

おわりに

寄せられた感想の中には、講師の教育実践を踏まえて日本の教育を見つめ直すものが多かった。一方的に教えるのではなく、子どものありのままの姿を受け止め、寄り添い、子どもの背中をそっと押してやる気を引き出す「恕」の教育は、目の前の子ども一人一人を理解するだけでなく、信頼し、尊敬しているからこそ、子どもの動機づけを確固たるものにしているのだろう。

「絵本作り」や「家庭学習ノート」は、日本語に苦手意識を持つイギリスの子どもたちが自発的に日本語を使って自分の気持ちを表現することを助けており、将来の夢に結びつけながら日本語学習の継続を図っている。普段接することが少ない日本語に興味を持つことは難しいが、だからこそ教師が「意志（will）」をもって子どもたちに応えていかなければならない。

多様化が加速する現代において、子どもたちの背景は一人一人大きく異なっているため、家庭や地域の事情だけでなく、国や文化も踏まえた視点が不可欠である。日本の教育にとって、今回の講師の教育実践を含め、国を越えて教育実践を学ぶことの意義はこれまで以上に大きくなっている。その上で、継承語を学ぶことが子どもにとってどのような意味を持つのかを考え直す必要があり、改めて目の前の子どもと真摯に向き合うことを始めなければならないだろう。

付記

本学術 Weeks は、勝冶友紀子（責任者）、岸本佳奈美、徐楽瑶、眞藤拳、西あかね、蓑毛智樹、川地亜弥子が企画・運営した。本報告は、「はじめに」を勝冶・川地が、１～４を眞藤・西が、５と「おわりに」を蓑毛が執筆し、勝冶・川地が全体の監修を行った。最終的な文責は川地にある。内容等への問い合わせは講師や補習校ではなく川地までお願いしたい。

講師の金子ひとみ氏、英国側で司会・コーディネートを担当して下さった實槻 Grant 純子氏に記して感謝する。